
大切な人...

あくあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切な人…

【Nコード】

N1329B

【作者名】

あくあ

【あらすじ】

最近親友、七海の様子が変…なんで私に何も相談してくれないの???

私達を出会わせてくれた神様に感謝したい。

あなたが隣にいない生活は考えられない。

照れるけど、いつも側にいてくれてありがとう…

「おはよお…何したの？」

朝、待ち合わせの場所に行くと七海が暗い顔をしていた。
おはよ…と小さく言った後、彼女は黙り込んでしまった。

「悩み事？」

喋りかけても、俯いている顔を動かさず応答なし。

「……言いたくないんならいいんだけど……大丈夫？」
七海はこくと頷いた。

私達は幼稚園から一緒に14年間も毎日隣にいる。
そんなに落ち込んだりしない性格だから、ちよつと不安…
私にも言いたくないなんて、重傷だ。

「ねえ…なにか知らない？」

七海の他にも、幼稚園から一緒のヤツがいる。
市ノ瀬結城。高校でもずっと同じクラス。

「何が？」

七海と結城は家が近くて、七海の異変の原因を知らないか
私は学校に着くとすぐ結城に聞き込みした。

「七海…なんだかおかしいんだ…」

結城は眉間にしわを寄せて考え込んだ。

「うん……昨日一緒帰ったときは別に…」

昨日一緒に帰ったんだ…へえ…

「帰ってからメールもしたけど、なんともなかったよ。」

結城にもわかんないか…一体昨日の夜に
なにがあっただろう…

帰るときも七海の様子は全然変わらなかった。

「七海…まだ言えない？」

七海が全く喋らないから私は少しいらだってしまった。

「はあ……ちょっとうざい…」

言った後に後悔しても遅かった。

七海は走って帰ってしまった…泣いてた？

「バカだ…どおしよ…なんであんなこと言っちゃったんだろう…」

結城に相談しようかな…

ヴヴヴヴ…ヴヴヴヴ…

携帯のバイブが鳴ったのに気づいて、溜息をつきながら携帯電話を開いた。

「結城？メールしようと思ったたら来た…」

苦笑いながら内容を読むと、慰めの言葉が書いてあった。

『誰にだって人に言えない悩みの一つや二つがあるから
あんま深く考えて頭痛めんなよ？瞳には俺がいるから。大丈夫だ
って。』

やっぱり良い奴だと思った。なんか恋人みたい…なんて思いながら
「ありがとう」とだけ返信した。

明日七海に謝ろう。酷いこと言った。

「え？休み…ですか？」

朝、なかなか待ち合わせ場所に来ないので
七海の家に行くと、おばさんに謝られた。

「ごめんね…あの子布団から出てこなくて…風邪気味かしら？」
私のせいかもしれない。

「わかりました。それじゃあ。」

学校で結城に慰められた気がしたけど、耳に入ってこなかった。

私達、こんな些細なことでこれまでの仲がくずれちゃうの？

やだよ。喧嘩だってするし、思いが通じないことだってあるけど

七海のことかとてつもなく大事なんだもん…

私はその日早退して、私達の思い出が詰まった幼稚園へ足を運んだ。
今日は創立記念だから、その幼稚園には人気がなかった。

校庭には塗装の少しはげている滑り台、

私が一番好きだったブランコ、

途中で何度も落ちてしまったうんてい…

そしてベンチ……七海??

隅の方にある木造のベンチに、ちょこんと七海が小さく座ってた。

「七海！……！」

なんでここに？でも言いたいことが溢れた。
七海は目を丸くして私の方を見た。

「私……」

「あのね、瞳に謝らなくちゃいけないの。」

「え？謝らなきゃいけないのは私の方だよ…」
突然口を開いた七海に私が驚かされた。

「ゴメン…ゴメンね…私、一人で悩んで…」
七海の間からは大量の雫がこぼれ落ちていた。

「七海…」

「ずっと瞳と一緒にだったのに、私最悪だった…」
私は目が泳いだ…七海がこんなに悩んでいたのに、私は
何もしてあげられなかった…力になれなかった。

「結城を…好きになったの…」

「結城…？」

ちよつと心が痛んだ…

結城を？七海が？

「瞳が結城を好きって分かったのに…どうしても…」
言葉に詰まる七海をじつと見つめた。

私のせいで悩んでたんだ…私の気持ちを大事にしてくれて…

「結城のこと、好きだよ？」

「…うん…ごめん。」

「でも私、七海の方が大事なんだけど。」

彼女はえ？という顔をした。

「結城とも幼稚園から一緒だし、大切だけど、それとは違う絆が私達にはあるじゃん。」

「……ひとみ……」

「悲しんで、俯いてる七海見たくないよ。
あんたが笑ってると、私まで幸せになれるんだもん。」

「ひと……」

私達の目からは、大量の涙が落ちてきてしばらく止まることがなかった。

「私も瞳が一番だよ？だから悲しませたくなくて……」
私達是一緒だった。

誰よりも大切な彼女と出会えただけで
私は生きていける。

これからもずっと大好き

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1329b/>

大切な人...

2010年11月30日03時33分発行